

身近な正倉院

文化財造形 助教授
 大山 明彦

正倉院正倉へ

本学より北方へ、途中緑豊かな春日山や、時に鹿達の軽やかに疾走する姿を目にすることができ飛火野を右手に、十五分程も歩けば東大寺大仏殿に辿り着く。

その北西側に広がる閑静な木立の中に、白壁に囲まれた正倉院正倉がある。校倉造りの正倉は、一千二百数十年の時を経てなお、往時の姿のまま建っている。初めてその前に立つ者は、必ずその偉大な姿に圧倒される。

かつて歴史の教科書などでその姿を目にし、また間口約三十三メートル、奥行九・四メートル、総高約十四メートルなど、その大きさを示す数値を記憶したことがあっても、実際にその姿を目の当たりにした時には、その威風堂々とした佇まいに息を呑む。

しかしながら暫し時間をおき、



正倉院正倉

若草山を背景とし、江戸期の再建になる現在の東大寺大仏殿よりもさらに大規模であった天平時代の大仏殿を中心に、東西七重塔が立ち並ぶ大伽藍を想定し、その伽藍のうちの一建物としての正倉であることに、想いを馳せることによって、その並はずれた規模の大きさを納得するに至る。

やはりこの倉は元来、大仏様専用の宝蔵なのである。

平成十年(一九九八)に正倉院正倉は、東大寺の伽藍を構成するうちの二建造物として、世界遺産に登録された。

正倉院宝物の展示

今秋も十月二十八日から十一月十三日の十七日間、奈良国立博物館で、第五十二回「正倉院展」が開催された。

正倉院宝物は、聖武天皇御遺愛の品々をはじめとし、天平勝宝四年(七五二)四月九日の東大寺大仏開眼会や、聖武天皇の御一周忌齋会の時に用いられた仏具・楽具など、その数は一口に、一万点とも数万点ともいわれるが、毎年それらのうちの代表的なもの数十点が選ばれて展示される。

宝物は後世の人々にも、現代の我々が享受している奈良時代の文化を、できる限りそのまま伝えるという考えのもとに、その保存が最優先されているので、特別なこととがない限り、同じ宝物はこの後十年間は出陳されないこととなっている。十年間という期間は、我々日常の感覚からは、たいへん長期に感じられるのであるが、宝物が経てきた時間を考えれば納得がいく。また表現を変えれば、十年間毎年「正倉院展」に通えば、正倉院宝物の代表的なものについては、すべて拝見できるシステムになっているともいえるのである。



正倉院宝物 鳥獸花背八角鏡(部分)

天平雲に会いに行こう

正倉院正倉は、平成五年四月から、土・日曜日、休日などを除いて、常に公開されている。

また奈良国立博物館は、本学より徒歩十分程の身近な場所にある。そして昨年より、新たに東新館が会場に加わって、大幅に会場内の混雑の緩和が図られている。

正倉院宝物は、世界遺産の対象外であるが、八世紀の優れた意匠のものを中心とした、すべて学術性の高い、世界にも希な伝世品ばかりなのである。

さあ、学歌を口ずさみながら、本物の天平雲に会いに行こう。